

拾い集めて都市と成す

泉麻人の街歩き

成瀬厚

町のなかを移動する者、つまり町の使用者（われわれすべてがこの者である）は一種の読者なのであって、おのれに課されたさまざまな義務や必要な移動に従って、言葉のいくつつかの断片を選び取り、それらを現働化するるのである。

ロラン・バルト★一

地域モノグラフの作成に丹念なフィロドワークが不可欠なことは常識であるにしても、ベンヤミンが示唆した遊歩者と都市の生理学との結び付きを歴史的に説明することや論理的に説明することは容易でない。ここではこの問題に現代日本の事例を用いて接近したい。

事例とするのは、東京生まれの自稱「コラムニスト」、泉麻人の作品群である。このベンヤミン的主題に対して泉の作品が適しているのは、彼の作品群がベンヤミンの「ポードレルにおける第二帝政期のパリ」★二に登場するいくつつかの文化的特徴を含んでいるからである。まず、近年泉が「街歩きの達人」としてテレビ番組に登場するほどの遊歩者である（と認識されていること。作品としても『散歩のススメ』一九九三、マガジンハ

ウスとして発表されている。次に、泉は幼年時代からの蒐集家であるということ。そして最後に、初期の書き下ろし作品『東京二十三区物語』（一九八五、主婦と友社）がまさに東京の地誌学的作品、いわば一種の都市の生理学であるからである（ここで分析の対象とする作品は図一）。

蒐集癖

泉は幼少の頃から蒐集癖があったという。昆虫採集から切手収集、作品中にそのことを書き記すくらいだから、それが今日まで継続していると同時に、作品生産にも作用しているということすら認識している。しかし、幼年の蒐集物それ自体が成人してから価値を高めるような「モノ」に固執する収集法ではない、ということ泉の特徴である。昆虫採集であれば、その生態に関する知識、また一九八六年から開始されたTBS系列の番組『テレビ探偵団』のなかで、意見番的出演者としての彼に求められたのは、過去のテレビ番組とその出演者に関するマニアックな知識である時には懐かしい番組の貴重な関連グッズが彼自身の蒐集品のなかから登場する。泉の蒐集癖が培ったのは、好奇心と観察眼、

そして観察の結果を知識として自らの記憶に体系立てて貯蔵することである。

一九五六昭和三〇年生まれ泉は大学卒業後、出版社に入社し『週刊TVガイド』などの編集をするが、会社在籍中の八〇年からペンネーム「泉麻人」名義のコラムを、マガジンハウス当時平凡出版の雑誌を中心に掲載するようになる。泉自身、『泉麻人のコラム』で書いているように、田中康夫の『なんとなくクリスタル』や糸井重里の広告コピーのような雰囲気の中で、執筆家としてのアイデンティティを確立していった★三。

泉が自ら作成してさまざまなメディアに散らばらせたコラム群はどのような意味を持つのだろうか。都市のなかを周遊するなかから集められた記述の断片。それをさまざまな雑誌の片隅に位置づけ、出版界という活字の宇宙のなかに「泉麻人」の名を散在させる★四。泉は元来蒐集家であるから、これをもう一度集めなければならぬ。この蒐集物はどんな形で世に出されるのか。八八年一〇月にマガジンハウスから出版されたコラム集第一弾は『泉麻人のコラム』と名付けられた。九一年の新潮文庫版表紙に用いられた写真はアルモンテのトマト缶を模

したものであるが、本人の意識としてはむしろ、かつて森永製菓「チョコボール」の景品であった「玩具の缶詰」であろう★。何が入っているかわからず、開けてみるのが最大の悦びで、実際の内容物は他愛のないモノ。そんな内容物に自らのコラムを当てはめている。裏表紙には、「そんな彼の偉大なる足跡を集大成した本書は、コラム魂がぎゅーつと凝縮された、天然果汁一〇〇パーセントの雑文缶詰である」とある。

続いて同じくマガジンハウスから九一年七月に刊行されたコラム集は『コラム百貨店』と名付けられた。泉自身が『コラム缶』を「巷のトレンド評論」という八〇年代を意識したものであることを認識しているように、九〇年代に入ったコラム集は、それ以降の都市への執着を色濃く反映している★。私はかつて『Hakajo』の都市記述の分析を通して、都市の全体はその部分である街が、いわば商品としてそれぞれが差異と役割を持つことで、まとまりを与えられることを論じた★。都市の部分が商品のようなモノとして独立した存在物として、消費社会の言説のなかで語られるとき、まとまりを与えられた都市は百貨店と同等なものと考え、ことで理解可能となる。百貨店に集められた商品は、さまざまなコンテクストを脱して陳列棚の空間を占有する。例えば、ブランドの靴がブティックの片隅から他ブランドのひしめくデパート靴売り場の一角へとやってくる。『コラム百貨店』に収められたコラム群も、元来は特定の雑誌の片隅

の空間を占めていたものが集められる。もちろん、商品にはあるべき場所、絶対的なコンテクストなど存在しないように、さまざまなコラムや情報同士が関係性も持たないまま誌面空間を埋めているだけで、その場所に位置する必然性は存在しない。しかしながら、雑誌でいえば綴じられた紙の束、百貨店でいえば商店建築物という特定の空間を占める物質が、そして編者や店主、建築家などの主体の関わりによって、ゆるやかな統一性を帯びることになる。それに対し、都市の統一性は誰によつて、どのように与えられるのか。

九四年四月に王国社から刊行されたコラム集『天使の辞典』は、九七年九月に装いも新たに「新潮文庫版『コラムダス columnas』というタイトルで刊行された。『indas』からタイトルと辞典形式を借用している。とかく真面目な辞典をパロディ化しているだけでなく、『コラム缶』のように個々のコラムを何かの軸で整列させるのではなく、一見恣意的のない「あいうえお順」に並べるのは、一種のバルト的断章でもある。もちろんバルトほど深い意図をもつわけではないが、自らの個々のコラムがそれ自身で独立性を持つと同時に、このコラム集には意図的な秩序を与えない、あるいはコラムを書いた時点の自分に編集時点の自分が再び解釈を加えることを避ける、という意識があつたのかもしれない。ともかく、その雑誌のコンテクストで、泉が想定する当該雑誌の読者層に向けての彼のメッセージ

題名	文庫版	発行年	解説・イラスト	単行本	発行年	連載	執筆期間
東京23区物語	新潮文庫	1988	川本三郎	主婦の友社	1985		
街のオキテ	新潮文庫	1988	西村重夫	新潮社	1986	ポパイ	1984~
泉麻人のコラム缶	新潮文庫	1991		マガジンハウス	1988		1980~1988
地下鉄の友	講談社文庫	1995	蛭子能収	産経新聞	1991	夕刊フジ	1991~
コラム百貨店	新潮文庫	1994	群ようこ	マガジンハウス	1991		1988~1991
散歩のススメ	新潮文庫	1996	川本三郎	マガジンハウス	1993	ガリヴァー	1990~1992
コラムダス	新潮文庫	1997		王国社	1994		1988~1997
東京自転車日記	新潮文庫	2000	陣内秀信	新潮社	1997	シンラ	
地下鉄の楽	講談社文庫	2000	蛭子能収	産経新聞	1997		
地下鉄の穴	講談社文庫	2000	蛭子能収	産経新聞	1997		
新・東京23区物語	新潮文庫	2001					

1—対象とする泉麻人作品 筆者作成

ジとして書かれたそれぞれのコラムは、そのコンテクストから引き離され、蒐集され、新たな作品が生産される。そこには特定の主体の意図を超えた、コラムの記述対象となった都市内に散在する様々な事物や出来事が超越的な秩序を持つように、ある種の作品性を持つものとして作者自身が期待していたのかもしれない。『コラム

ダスの元本のタイトル『天使の辞典』はそんな
神的超越性を含蓄しているのだろうか★八。

こうしたコラムは、マガジンハウス版『コラム缶』
表紙にあるように、若者風俗、芸能、音楽、街
レトロ、テレビ、などを題材としている。泉にと
つて「街」も流行現象のネタとして利用されてい
るのだ。八〇年のデビュー当時の『STUDIO
VOICE』誌のコラムでは「東京の恥部を行く」
というタイトルで、「真の都会人はもつと日の当
たらぬ街に注目してあげようではないか」★九
という。列挙されるのは、例えば地下鉄の終点
で、西高島平、西馬込、北綾瀬、東大島など
である。実際、多くのコラムではこの実践がなさ
れ、「何のとりえもなさそうな町」「武蔵小金井
★一〇、「荒削りな、水で薄めていない濃縮ジュ
ーのような」横須賀★一一、錦糸町や金町の駅前
のパチンコ屋★一二などが紹介される。また、日
本の海水浴場を洋楽やサザンオールスターズ、
松任谷由実などをBGMにして疑似アメリカ西
海岸にするのではなく、泉得意のB級アイドル
ポップスをBGMにして「リアルな日本の海」★
一三を感じることを薦める。また、あまりにも記
述すべき対象を見出せない場合にも、それを
逆説的なネタにする。「一応こういう街の取材
つては、現地にきた瞬間に、なにか感じなく
ちやいけぬ」★一四。

「蒐集するとは、個人の欲望を環境と歴史が織
り合わせる織り合わせに織り込ませることであ
る」★一五。小説家も無数に蒐集された生活の断

片を利用して、想像上の世界での出来事を紡
ぐが、物語のプロットは作者の構想力によるも
のであり、断片はその骨子に肉付けするもので
ある。それに対し、泉のような執筆家には、こ
の引用に示された蒐集文化の特徴が当てはま
る。物質と観念、さまざまな形態をとつた蒐集
物の選択と配列、それが泉作品のプロットであ
る。各々の事実が齟齬を来たささないように、作
者自身の欲望を接着剤としてそれらを織り合
せ、テキストは生産される。

地下鉄——動くパサージュ

地下鉄車両はそれ自体動いてはいるが、その内
部空間はまさしく通路(Passage)であり、乗降客
は次々と駅毎に移り代わり、その通路を通過
していく。アーケードの商店街での人々が持つ
ているような目的を、地下鉄という通路にいる
人々は持つていない。当然、地下鉄の個々の路
線はそれぞれ経由地と目的地を持つているか
ら、特定の車両に特定の時間に乗り合わせた
乗客たちは無作為な社会的標本にはならない。
しかし、人々と次々とすれ違う商店街に対し、
一定の時間お互いひとところに留まりゆつくり
と他人を眺めることのできる地下鉄という、こ
んな人間観察に適した場を泉が見逃すはずが
ない。駅のキオスクなどで販売されるイメージを
持つ『夕刊フジ』へのコラム連載ということもあり、
読者に身近な話題、しかも地下鉄で一駅の間
読み終えるようなコラムを、という形で九一年

二月から始まったのが「地下鉄の友」である。
連載初回は「地下鉄の視線」と題された。これ
から泉の視線が存分に多数の乗客に向けられ
ていくのだが、この初回コラムでまず、その乗客
の視線がどこにあるのかを考察する。

一、雑誌・新聞・文庫本、

二、車内吊り広告、

三、目を閉じる、

泉は大抵がこれらだといひ、乗客たちはお互い
に視線が合うことを避けるため、半ば演技で
これら三つの振る舞いに及んでいるという★一六。
この文章だけ読むと、多くの乗客たちは他の
乗客には目もくれず、泉のような観察者が特
権的な視線を獲得しているように思える。しか
し、この泉の説は独断ではなく、読者は大いに
共感を得ることができるといえる。乗客たちは他の乗
客を見ていないようによく観察しているか
らだ。このことは蛭子能収のイラストにも十分
に示されている(図2)。「すべての言葉、すべての仕
種は演技であり、その目的、効果との関係で理
解しなければならぬのであつて、ただありの
ままの本心を表現、つまり外在化しようとする
かのごとく、話し振舞っているその人間からだ
け理解してはいけないのである」★一七。また、テ
レビ番組などにも出演している泉であるから、
地下鉄車内という公共の場では見られる対象
ともなる。泉の観察眼は決して特権的なもの
ではなく、誰もがとりうる都市的眼差しであ
ることにこの作品の魅力がある。



2—地下鉄の社会風景
出典=泉麻人『地下鉄の友』(講談社文庫、1995)
イラスト: 蛭子能取

「地下鉄の友」はそうした眼差しに基づく社会風景の描写である。顔の特徴からその人物の内面を判断する観相学とは異なるが、身なり(ナイロン素材の黒色透明靴下、新入社員の真新しいスリッパ、耳の上の赤鉛筆、キョットスカート、ルーブタイ)や仕種端この席に座ること、傘でゴルフのスイングなどから、階級意識に満ちた人物判断がなされる。しかし、それは価値観の上下軸を持った差別的なものではなく、他者への眼差しという深刻な問題をパロディ化し、笑い飛ばしている。自分を含めたすべての人が恥ずかしい部分を持っており、場合によってはそれを人前で披露してしまうような人間臭さを確認することで、都市生活者の横並びの差異を強調している。

都市神話とアイロニー

「街のオキテ」は八四年から雑誌『ポパイ』に掲載された、泉にとって初期の連載コラムであるが、「地下鉄の友」で定性的に描写された社会風景が、ランキングの形式を装って定量的に示されている。この作品の試みは、いわば「都市神話」の蒐集といつてもよい。都市神話といつても切り裂きジャックのような恐怖を呼び起すような非現実的なそれではなく、バルト的なもの、すなわち生活に身近でありながら日常の実践に制限を加える観念のことである。この作品のスタイルはアイロニーである。ランキング形式というのは当時八〇年代にテレビ番組や雑誌でよく採用された形式であり、また泉自身、本書を「シテイマニアル講座」★八と表現するように、やはり当時氾濫したハウ・トゥウものの装いを呈している。しかし、根拠もない指数でランキング表を埋めることによって、根拠ある数字が多くの価値判断に力を出すことに対する批判とする。また、「ゲロのカッコイイ吐き方」についての断定的なマニアルを提示することで、多くのハウ・トゥウものを暗に批判している。批判といつても、それは一九六〇年代的な政治的な深刻さはない。ここで批判の対象となっているのは類型的な都市生活へと導く、メディアが吹聴する消費社会イデオロギーであるが、資本主義社会そのものを批判するものではない。といつても、

「地下鉄の友」にもみられる泉のイデオロギー批

判は単なる「消費社会イデオロギー」、すなわち経済的利潤を目的とする人を欺くような虚偽意識に限定されない。都市生活を営むのに不可欠な価値判断でありながら、その価値観は特定の主体に帰属するものではなく、誰でもない想像の主体、大文字の他者の欲望に帰属するものである。「道を探し出せるような、ある種の想像的『地図』を提供するのがイデオロギーであり、このためにもイデオロギーは必要なのである」★九。都市生活にとって、ある種の社会通念は必要であるが、それがイデオロギー的なものであることを認識しているか否かが大きな違いとなる。

そんな「街のオキテ」の連載初回は「東京二十三区物語」に共通する泉の都市感覚を反映した「東京二十三区の偉い順」ランキングである。このランキングはあくまでも泉の恣意的なものであるが、そこには泉が想定する『ポパイ』読者の価値観が組み込まれている。また、一般的常識も、「千代田、中央、新宿は、区分地図の前の方に掲載されているということ、潜在的に『偉い区だ!』と考えている人が多く」とある★一〇。八四年の連載当時から単行本化の八六年には市郡部ランキングの追加、文庫化の八八年には二十三区と市町村部を合わせた総合ランキングが追加されている。ここで歌謡曲ランキングと同様に、街は人間主体のように分割可能で成長するものと捉えられる。もちろん、建築物を建て、店舗を開き、買物に訪れ、メディアでその

場所について語り、消費者同士が話題にするように、場所にはたらきかける人間主体の意識が、場所を疑似主体として捉える限り、このことは単なるアナロジーとして批判することはできない、ある種の真実である。「場所は自らを他の場所と差異化して資本投下を得ようとし、またそれを維持しようとして他の場所と競うようになるのである」★二。

記述の内容と形式、それらをずらすことで微妙なスタンスを保ち、泉は自らのアイデンティティを確たるものにしていく。このずらしがアイロニーであり、「それによって、我々がそのなかに陥りたくないと思う世界から、我が身を切り離すことができる、いやしくなくとも想像力のなかでそれができる」★三。泉は都市について書くことで、大多数に屈しないことによる秘かな抵抗を試みてきたが、今となつては単なる多様な価値観のひとつなのかもしれない。

歩いて断片を採取する

重層的で構成的な現代社会の中で、目的を持つたり、持たなかつたりして、人間は、自らの彷徨の欲求を満足させるために、障害に満ちた空間を移動しなければならない。何故なら、彼が出会いたいと思う事物、サーヴイス、個人は、同一の場所で見つけることができず、それらが、回廊、つまり、いくつもの通りによつて結び付けられている都会という

織物の中に、散開しているからである。

モールホルム★三

こうした日々の営みの基本形態、それは、歩く者たち(wandermann)であり、かれら歩行者たちの身体は、自分たちが読めないままに書きつづつている都市という「テクスト」の活字の太さ細さに沿つて動いてゆく。

ミシエルトセルト★四

歩くこと、それは視力を持った者にとつては、時間に伴つて視点の空間的位置を変えることであり、同時に視線を変えることでもある。「歩くことで、一つの風景の中にゆつくりとリズムを刻むように入つてゆくと、その風景は異なつたプロポジションをおびるものである」★五。読書の場合も視点は変えないものの、視線を誌面空間上で連続的に変化させる。こうした行為の類似性から、「都市というテクスト」★六の発想は生まれる。当然、この歩く行為も単なる受動的な行為ではない。認識し、解読した意味を記憶のなかに刻み込むのだ。特に、執筆を生業とする泉のような遊歩者は、歩くことは同時に書くこととなる。「ある場所を初めて訪れるということとは、その場所を書きはじめることである」★七。あるいは「書くひとは読むひとと同一人である」★八。また、古代ギリシア・ローマの語源を辿りクリステヴァが、「読む」とはまた『集める』、『摘む』、『つけ狙う』、『跡を見つける』

『取る』、『盗む』であつた」★五といつたように、都市解読と蒐集文化とは結び付く。

この歩行観察の行為は、どのような文章を生み出すのであろうか。第一に、視点と視線の移動に伴つて連続的に移り変わる風景の記録がある。旅行記と共通する視覚映像の実況中継だ。次々と現われる事物の空間的な近さは、文章における単語間の距離に置き換えられ、文法的・論理的結合力と同等となる。第二に、観察者＝作者の身体的・行動の通時的記録である。第三には、都市のなかの事物と観察者との視覚を媒介にしてカッピングしたことによつて、観察者の頭に浮かぶ思考の記録。これらは、観察者の主体性を通過しているため、表現された文章の前後関係＝文脈には意識下の論理性が存在しえる。第四は、観察者から作者へと移行する過程で追加される記述であり、これまでの観察記録から連想される作者個人の記憶、作者が収集した情報を用いた説明的論理に基づいた記述の配列である。そもそも泉は地図好きであると同時に地誌好きである。作品中で用いられるものには、「手元にある『東京風土図』(教養文庫)★三〇」、「手元に昭和三二年、平凡社より発行された『日本文化地理大系』という写真集」★三一などがある。

八〇年代を通して単発的なコラムを累積していくと同時に、泉は「地下鉄の友」のように、連載もののコラムを生産しつづける。もちろん、泉はコラムニストであるから新聞の連載小説のよ

うに、次号へ筋が継続するような類の連載ではなく、一回毎の読み切りである。そうした、読み切りの連載として一九九〇年から二年間「ガリヴァー」に掲載されたのが「散歩のスズメ」マガジンハウス一九九三である。

近頃、頓に散歩が愉しい。

これといって名所旧跡でも、はたまたトレンディなストリートでもないような町を、ただふらふらとボケ老人の境地で歩く。そんなふらふら散歩の道すがら見つけた「情報誌」の範疇から外れたようなお店屋さん、妙な物件、あるいは人などについてたらたらと書く★三。

このような冒頭言でこの連載は始まった。「散歩」と言えば、まずは近所からだ」といいながら、第三回目では「僕は子供の頃から地図好きで、暇があると『東京都区分地図図帖』などを読みふけていた」といい、地図という表象から培われた自身のメンタルマップを基礎に、この連載の構成を考えはじめる。この「街歩き」という行為は、蒐集家泉にとつては当然蒐集物を獲得する手段でもある。先述したように、泉は知の蒐集家であり、モノの場合でも、オークションでしか手に入らないような希少物に興味はない。もちろん蒐集家である以上、希少物に関心を抱くのはかわりないが、むしろ大多数の人が価値を見出さないような「物件」に執着する。「物件」とはモノでも看板でも風景でも飲食店でも人でも

もかまわれない。何気なくそこに存在しているものを、散歩の道すがら偶然自然に出会うことに泉は快楽を感じている。「町の狭間のこういう隠れ家が好きだ」★三三。「こういったウネウネ迷路状態のほうが散歩者にとつてはうれしい」★三四。「路地裏のこそっとしたところに旨いメシ屋はひっそりと存在しているような、そんな気がする」★三五。こんな語り口が作品中に散在する。

八〇年代のテンポの良い、アイロニーに満ちた文体のコラムから、この「散歩のスズメ」、同様の企画で自転車を用いた「東京自転車日記」(一九九七、新潮社)に至つては、明らかに泉の加齢を感じさせる文体の変化がみられる。「散歩のスズメ」の「あとがき」には、「坦々と散歩をしているときの速度で読めるような町歩きのエッセイを前々から書きたいと思っていた」とある。先述したように、「街のオキテ」などではメディアが吹聴するような大多数の価値観を笑い飛ばし、その支配的価値観の下では恥ずかしさが込み上げるような少数派の価値観を擁護していた。この価値観の対称性が、若者と中年のそれである場合も少なくなかったが、九〇年代に入つて、都市のなかで泉が発掘する物件は時代的な希少価値を帯びているものが少なくなつてきた。いつしか、希少性は都市、あるいは都市生活における歴史的残存物に求められることが多くなり、泉の文章はノスタルジーが色濃くなる★三六。

風刺的都市地誌学

一九八五年一月主婦の友社から刊行された『東京二十三区物語』は、泉本人の言葉によれば、「本書は、そのような二十三区の歴史を解説しつつ、そこに生活する人々の行動様式、そして彼らを収容する町々の姿を見つめていく、ごくまじめな社会学書です」という。形式をマス・メディア調にした『街のオキテ』に対し、『東京二十三区物語』では学術書のスタイルを採用する。やはり内容と形式の「異化」を謀るこの作品のスタイルはアイロニーである。ただし、学術書といつても学者が学者のためにだけ書くという意味での専門書ではなく、本文は「ですます」調で統一され、二〇〇一年の改訂版『新・東京二十三区物語』には、「原本のコンセプト——小学校の社会科教科書風のタッチ」★三七と記されている。

東京は狭い街です。しかし、観察をつぶさに行っていくと、各区各町ごとにさまざまな性格を持った異なる人種がそこに暮らしていることがわかりました。「東京人」と一言に言つても、二十三区内の西部と東部では、骨格、容貌、食生活、価値観、そして髪の毛質に至るまで、異なつた趣があることを★三八。

『東京二十三区物語』の詳細目次を(図3)に示したように、本書の構成は地誌学的であるが、内

区	詳細目次	区	詳細目次
千代田	番町あたりの生活	渋谷	公園通りの夜明け
	神保町界隈の生活		ハチ公あたり
	秋葉原に集う者たち		モヤイ像の秘密
中央	屋下がりのアンガス牧場	中野	センター街に集う人々
	モチを買う男たち		文化や雑貨店界隈
	鳩居堂と森永ラブ		松濤の人々
	市場界隈の人々		代官山体質と上原体質
	島の人々		原宿竹下悲話
	日本橋気質		ミドリガメとアオマツムシ
港	コリドー街のカラス	杉並	中野心理の本質
	六本木の発達		高円寺の人と暮らし
	調髪コンチの反乱	豊島	高井戸の人と暮らし
	トラボルタ来航		池袋西武の神話
	カフェバーのなりたち		ロサ界隈の活気
	青山とオリンピック		ロサ界隈風情の変貌
	ブルーボード気質		目白のジオグラフィ
東京タワーのアイデンティティ	徳丸が原の歴史		
新宿	歌舞伎町に暮らす人々	板橋	成増と常盤台
	15歳・京子の場合		板橋のパキスタン人
	歌舞伎町に伝わる方言、言い回し		練馬人の体質
	落合に暮らす人々		豊島園あたり
文京	牛込に暮らす人々	練馬	石神井の人々
	文京老人の体質		光が丘民族
	後楽園の位置づけ		練馬人の研究
台東	上野のいろいろ	北	王子あたりの喫茶風景
	浅草におけるナウ		浮間風情
	風宮後、吉原事情		南千住の野球親子
	谷中の山の手意識		迷路の町 汐入
墨田	楽天地の恋人たち	荒川	町屋・熊野前・小台
	錦糸町西武と江東ニューファミリー		千住の暮らしぶり
	両国顔とシャガミの風習		変わりゆく北部地域
	曳舟・玉ノ井・鐘ヶ淵		足立人のプライド
江東	亀戸ゲルマニウム	葛飾	京成文化の本質
	マッチ箱旅館風情		柴又の人々
	埋め立てに暮らす人々		葛飾キャベツの滅亡
	五反田の「山」と「川」		水元デートのマニュアル
品川	アーケードの誇り	江戸川	北の旧地・小岩
	大井埠頭マッドマックス		花と金魚
	大井埠頭マッドマックス		南の新地・葛西
目黒	賃貸マンション・ランキング	統計	葛西沖のディズニー効果
	碑文谷自宅娘の気質		バンチパーマ占有率
	哀愁の羽田空港		水原弘・由美かおる看板残存率
大田	蒲田フライデーナイト	統計	コンパニオン密度A(晴海勤務)
	ニセ田園調布人たち		コンパニオン密度B(ニュー風俗勤務)
	成城の人々		1アールの農地、空地あたりのデニーズ出現率
世田谷	奥沢の人々	統計	築華街における「焼肉・サウナ・パチンコ」占有率
	三軒茶屋の人々		
	とりあえず下北沢		

3—「東京23区物語」の内容
筆者作成

容は社会学的・人類学的である。本人の言葉に「社会学書」とあるように、作者の基本的な関心は特徴的な風貌で特徴的な行動を行なう人物の描写である。本書での人物描写は彼の諸作品に共通する類型的なものである。多くの社会調査も多数の観察結果を集計し、因果的な関係はともかく統計的な妥当性を持って抽象的な類型的人物を創造する。本書の場合、実証的な論証の手續きは取らず、そうした類

型的人物像を作り出す原理に土地・場所を利している。例えば、「世田谷区」のなかの「成城の人々」には森富夫さん(五六歳)というフィクション的な人物が登場する。中堅商社を退社し、自ら事業を起こし、会社が成長を遂げ、「戦後成金」として成城に移り住んだという。趣味はゴルフとカラオケで、ゴルフは厚木で、カラオケは演歌よりも洋楽ポップス、大学生の娘はコンパニオンのバイト、大学付属の受験に失敗し都

立高校に通う息子、元宝塚でホームパーティー好きの夫人、アフガン犬のジェリー、バロック建築を模したプール付きの家、私用と公用のベンツ二台、夫人用のゴルフ一台というラインナップ。通常の社会調査では描くことの少ない具体性が、週刊誌のルポルタージュのように描かれている。こうした階級を媒介とした場所志向的な社会類型は、東京の全体性を基礎としている。「東京

これは8年前の統計です。88年10月現在、取材班が調査した結果、練馬、杉並、中野の一部を除いて、「水原」「由美」はほぼ絶滅したようです。ホーロー塗り看板の繁殖しやすい地域は農地の中に古くからある商店街ですが、道路拡張やマンション建設によって絶滅の一途をたどったようです。かわってそれらの地域に増殖しているのが「サラリーローン・マルフク」の看板です。



4—社会統計地図。「水原弘・由美かおる看板残存率(80年5月調べ)」
出典=泉麻人『東京23区物語』(新潮文庫、1988)

の町は、西高東低(正確には南西がリッチで、北東がブツ)の傾向がありますが★三九といひ、場所とそこに暮らす住民の社会階級とを結び付けて論じる「東京二十三区のサベツ遊び」★四〇に興じるのが本書である。巻末に「統計」として添付された社会地図は泉の東京メンタルマップを表象している。人間の容貌(バンパーマ、コンパニオン、ガングロ)、景觀要素(ホローの看板)★四、商業施設(デニーズ、焼肉屋、サウナ、パチンコ、イタリア料理店、回転寿司、スターバックス・コーヒー)は特定の地域に特徴的に観察されることが主張される。それらの事物が地域を特徴づけ、また同時にそうした地域の環境がそこに特徴的な施設を生み出し、特徴的な人物を育む。本書の都市記述は環境決定論的な都市の生態学である。「バ

ルコの発生以来、それまで普通の民家が軒を並べていた沿道に、雨後のタケノコの如く喫茶店やブティックが出現し」★四一というように、都市内に立地する施設は自然発生的なものと捉えられ、社会集団の排他性は生物の生存競争に喩えられる。「野性集団が町を支配するようになります。外来してきた西洋タンポポが、お上品な国産タンポポを押しつけて蔓延したように、どんな世界でも「外来種」は強い、という定説です」★四二。「山姥はやはり一種の『生物学的突然変異』★四三。このことは、もちろんかつての人間生態学としての都市研究★四四を想起させるが、泉作品においてはあくまでもメタファーである。

都市論としての東京論を見直す作業は数多くなされ、本誌一二号の特集「東京新論」では都市論ブームを踏まえた社会学的都市論である吉見俊哉「都市のドラマトウルギー」(弘文堂、一九八七)や写真家の東京を題材とする作品も批評の対象とする作業がなされた★四五。冒頭ではベンヤミンの主題と表現したが、ここで試みた泉作品の分析は、より大衆的な都市論を見直す作業でもある。人文・社会科学に携わる者にとつては特筆に値しないようであり、多くの一般読者に支持されているテキスト群を詳細に分析してみることも必要であろう。遊歩者としての特徴を持つ泉麻人の都市記述。詳細に分析する以前は、足で稼いだ些細な都市の断片が、どのように東京全体を読者に感じ

させる作品を築き上げていくのか、という点に焦点を当てていたが、泉の頭のなかには常に東京の全体像があり、そのことが作品生産に大きく作用していることが確認できる。先述したように、泉の蒐集癖は特定のモノに愛着を持つような類のものではなく、モノであればモノの体

系のなかで、知であれば知の体系のなかで、常にその蒐集物を位置づける特徴を持っている。昆虫採集であれば、採集してきた具体的な個体を図鑑と照らし合わせ、またそれが生息する環境と生態系のなかで理解する。街であれば、メディアが騒ぎ立てるトレンドを常に念頭

に置きながらそこから外れるような街をこよなく愛す。ここでは初期の作品『東京二十三区物語』を分析の最後に持ってきたが、泉がこの作品を都市記述の最初に発表しているのは、必然的であったことが理解できる。

洋一訳、平凡社、一九九六、二六二頁。

★二〇—泉麻人『街のオキテ』、一六頁。

★二一—デヴィッド・ハーヴェイ『空間から場所へ、そして場所から空間へ』(加藤茂生訳、『TOPIA』No.11、NAX出版、一九九七、八八頁。より具体的には、英国の地方自治体による企業誘致戦略を分析した以下を参照されたい。J. A. Burgess, Selling Places: Environmental Images for the Executive, Regional Studies 16, 1982, pp. 1-17.

★二二—ノースアップ・フライ『教養のための想像力』(江川徹十前田昌彦訳、太田社、一九七九、三七頁。

★二三—アンナム・A・モイル十エリザベト・ロメル『生きもの』(古田幸男訳、法政大学出版局、一九九二、一〇九—一〇頁。

★二四—ミシェル・セルト『日常の実践のポイエティック』(山登世子訳、国文社、一九八七、二〇二頁。

★二五—ロラン・バルト『偶景』(沢崎浩平十萩原芳子訳、みすず書房、一九八九、一五頁。

★二六—同『記号学と都市の理論』(前掲、一〇九頁。

★二七—同『表徴の帝国』(宗左近訳、新潮社、一九七四)四九頁。

★二八—ジュリア・クリステヴァ『記号の解体学—セメイオチケイ』(原田邦夫訳、せりか書房、一九八三、九八頁。

★二九—同書、一八頁。

★三〇—泉麻人『散歩のススメ』(新潮文庫、一九九六、七五頁。

★三一—同書、一七五頁。

★三二—同書、九頁。

★三三—同書、四頁。

★三四—同書、七六頁。

★三五—同書、一〇二頁。

ド街ツク天国へと都市への傾向がみられる。

★七—拙稿『Hanakoの地理的記述に表象される』(東京女性のアイデンティティ)『地理科学』五二巻、一九九六、二九—三六頁。

★八—もちろん、アルファベット順やあいうえお順が、そのまますの恣意性を回避することにはつながらず。場合によっては安易な秩序を作り出す。英国における写真家集団による田園風景の記録という実践については以下を参照。J. Taylor, 'The Alphabet Universe: Photography and the Picturesque Landscape', Pugh, S. ed., Reading Landscape: County/City/Capital, Manchester University Press, 1990, pp. 177-196.

★九—泉麻人『泉麻人のコラム』(マガジンハウス、一九八八、九頁。

★一〇—同書、二九頁。

★一一—同書、三三頁。

★一二—同書、五二頁。

★一三—同書、三七頁。

★一四—同書、六八頁。

★一五—ロジャー・カーディナル『蒐集とコロージュ制作—クルト・シュワッターズ』(ジョン・エルズナー十ロジャー・カーディナル編著『蒐集』(高山安十富島美子十浜口裕訳、研究社出版、一九九八、収録、八五頁。

★一六—ミラン・クンデラが『不滅』(菅野昭訳、集英社、一九九二、二頁で、『この世には、個人の数より仕草の数のほうが少ないことは明白である』と書いていたことを思い出そう。

★一七—アンリル・フェーブル『日常生活批判序説』(田中仁彦訳、現代思潮社、一九七八)六三頁。

★一八—泉麻人『街のオキテ』(新潮文庫、一九八八)二二頁。

★一九—テリー・イーグルトン『デフォロギーとは何か』(太橋

註

★一—ロラン・バルト『記号学と都市の理論』(篠田浩一郎訳、現代思潮社、三〇〇、青土社、一九七五、一一一頁。

★二—ヴァルター・ベンヤミン『ポードレルにおける第二期のバリ』(野村修訳、『ポードレル 新編増補』晶文社、一九七五、三五一—一六頁。

★三—こうした雰囲気については、批評家、加藤典洋が論じている。マガジンハウスの雑誌群については、加藤典洋『大・新・高』(『日本風景論』講談社、一九九〇、二〇三—二五四頁。一九七〇年代前後の日本文字については、加藤典洋『なんとなく、クリスタル』から『現代文字の倫理』へ』(『アメリカ』の影、河出書房新社、一九八五、七二—八頁。

★四—泉自身『コラム』(『あとがき』で初期の頃のコラム執筆について、『何か(泉麻人)という商品を売りたいというような意識』だ」と書いている。

★五—マガジンハウス版の表紙はシナ缶のような背の低い缶がイラストで描かれている。ちなみに、帯には以下のように示されている。

内容成分(四〇三〇中)

真 実 九五頁

ノスタルジー 八九頁

おちゃらけ 四七頁

アイロニー 四四頁

ネク ラ 三三頁

愛 二四頁

その他 六六頁

●合成保存料は含まれておりません。なるべくお早めにお召し上がりください。

★六—テレビ出演においても、一九八〇年代後半のテレビ探偵団から九五五年に放映が開始されたテレビ東京『出役!ア

論に近づいているといえるかもしれない。実際、『東京二十三区物語』の新潮文庫版には「クールな『地域差別』と題する解説を、「散歩のススメ」の新潮文庫版には「大きな町の小さな町歩き」と題する文章を寄せている。

★三七七—泉麻人「新・東京二十三区物語」(新潮文庫、二〇〇一)七頁。

★三八八—泉麻人「東京二十三区物語」(新潮文庫、一九八八)九頁。

★三九—泉「新・東京二十三区物語」二頁。

★四〇—泉「東京二十三区物語」一四頁。

★四一—泉「新・東京二十三区物語」一七〇頁。

★四二—同書、一七四頁。

★四三—同書、一七六頁。

★四四—R・D・マッケンジー「ヒューマン・コミュニティ研究への生態学的接近」(ロバート・E・パーク、W・パーゼスほか「都市」)

「大道安次郎訳、鹿島出版会、一九七二、六五—八〇頁)を

参照。

★四五—中筋直哉「東京論の断層——「見えない都市」の十有余年」(1011「NONO」I・NAX出版、一九九八、一六八—一七七頁)。毛利嘉孝「東京はいまいかに記述されるべきなのか?—「ボリス」の概念を中心とした都市論の試み」(1011「NONO」I・NAX出版、一九九八、一四四—一五五頁)も参照されたい。